

二十一年五月に引揚げ前に祖父が病死した。一家泣き濡れて、翌日コロ島から興安丸に乗船、舞鶴港へ、そして母の生家興津にたどりついた。その間茂代さんは父の小間使いとして一生懸命協力したつもりである。父は引揚げ早々興津で塩づくりを始め、茂代さんは高校一年生になった。

悲しいかな父は昭和二十二年一月二十七日、大勢の家族を引揚げさせて四十三歳の生涯を閉じた。

茂代さんの両親は現地人の満州従業員やその家族から慈父、慈母のごとく慕われていた。事業は大きく拡大していったものをと父は口癖に言つて、満州人に感謝していた。茂代さんは父の心情を子供心に聞いて育つた。父を尊敬し、父に協力してきた情愛の清き気高い親子の絆を今なお肌を感じ伝わる親孝行ものである。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

南無妙法蓮華經

福岡県 境野 静子

明治四十三年三月十九日、福岡県嘉穂郡桂川村にて生まれました。私の父は住友系の豆田炭鉱に勤めていたそうです。当時の炭鉱は余り景気もよくなく、皆、船に乗って玄界灘を渡り、大陸へ大陸へとあこがれて渡つたそうです。父もまた、その一人でした。私たち三人の子供と母を残して、友人の紹介で満州鉄道に就職、単身満州へ渡つたそうです。そして私が七歳になつて、小学校に入学する前に母と三人の子供を連れて行くため、日本へ帰ってきました。その当時のことではっきりと記憶にあるのは、あの大連の埠頭が大きくて立派なこと。ボートという汽笛とドラの音が、今もハッキリと脳裏に残っております。大連から汽車に乗り、撫順炭鉱の職員宿舎についてびっくりしたことは、赤い煉瓦の五軒長屋の立派な玄関が一つ一つあり、中

に入ると、初めて見るガス台があり、それに蛇口をひるねと、シャツと音のする水道があり、見るもの見るものが目を見張ることばかりで、子供心にお父さんは偉いなアーと思ったのを懐かしく思い出します。

父の勤める所は大山採炭所といい、採炭係でした。父はまじめな堅物で一生懸命に自分の仕事に精を出す人でした。

採炭所を十年間まじめに勤め、念願の商売を始めるため、格好の場所を見付け、子供相手の玩具店を出すことができました。私も撫順市内の尋常高等小学校を卒業後、撫順警察署から髪結い師の免状をいただくことができました。その後、父が私のため一軒の家を見付けてくれたので、髪結い師として独立、腕の方も客に認められ、だんだんと客足も増えてきました。私一人ではとても客を捌ききれなくなり、若い弟子を使うまでになりました。そのころ同じ町内の床屋を営む東野鹿之助と結婚しました。東野は女道楽のひどい主人でしたが、次々と生まれてくる子供のために、じっと我慢をしながら、五人の職人を頼りに懸命に働きました。

た。お陰様で、人並み以上の財産を築くことができました。忘れもしません。昭和十八年五月三日、ちょうど末

っ子の譲二の三歳のお宮参りの日でございました。役場からと言って郵便配達のおじさんが、「奥さんおめでとう」と言って差しでしたのは赤い紙切れの召集令状でした。それから間もなく、昭和二十年八月十五日終戦。目まぐるしい一日でした。何がどうなったのか、あの暴動の恐ろしさは、夜などねむれず体を固くして、うずくまっておりました。ソ連兵を先頭に撫順の町を総なめにした暴徒におののきながら、長男の正男を頭に八人の子供を引き連れて、二人残ってくれた職人に助けられ、久保町にいる妹夫婦の家に逃げのびました。何にしても銀行に持って行くはずの現金が三千円ばかりあったのは天の助けでありました。南台町、北台町、久保町と満鉄住宅のある所は、終戦後直ちに、自警団が組織され、大満鉄株式会社の大満鉄で安泰に守られておりました。

しかし、姉妹とは言え五人家族の中に、九人もの家

族が何日も居座ることもできず、市内が元の平静さに戻ったところを見計らって、子供を連れて、そーつと我が家をのぞき込みましたが、そこには見知らぬ満人がいて、元あつた商売用の鏡も椅子も何一つ残つておらず、「僕の家には知らない満人がいるよ、お母さん、どうするのどうするの」と子供が泣きじゃくります。悲しいのは母さんの方だよと言いたいのをこらえました。何とか今夜の宿をと思いますが、我が家の天井に穴のあいた板切れ一枚残つていない部屋をのぞいたときのこと頭に残り、がく然として佇むばかりでした。日本人の友人は、右を見ても左を見ても、どこに行つてしまつたのか、心細さが先に立つばかりでした。子供たちは、泣きじゃくつております。九月ともなれば大変寒さが身に染みるころです。「寒いよ。お腹がすいたよ」と子供たちが言い始めました。ふと思ひ出しました。支那町の盗品市場だと考えつきました。あそこに行けば何でも手に入ると、でもあそこは、今はもう敵地同様の所だと思ひながら背に腹は変えられぬ、
「えい、ままよ」と度胸を決めて、八人の子供がはぐ

れぬように腰ひもをしつかり握らせて、支那町に向かいました。満人、鮮人、苦力、男、女、子供、老人たち皆が、和服の女と大勢の子供にあつけに取られて見ております。負けられぬ。「目を伏せては負ける」と心で言い聞かせながら、子供たちの食べ物を籠にいっぱい買い込んで路地に入りました。

まず、赤々焼けた焼鶏を引きさいて子供たちにわけて食べさせてやりました。「お母さん、甘いよ、甘いよ」と大喜び、ふかふかの「マントウ」に舌つづみをつけて食べる子供の姿に満足と悲しさがあふれ出しました。その様子を向こうから見ていた満人の老人が、寄つてきて、私を散髪屋の太太だと知っていたらしく、日本語で、「どうしてここにいるか？」と聞きますので、「家がなくて子供寒い、子供たくさん、主人いない」と片言で話しますと、老人はうなずき、手まねきして歩き出しました。死ぬときは子供と一緒に、心に決めて後に続きました。老人の家らしい大きな土塀に囲まれた、かなり裕福らしい家に連れて行かれました。老女を呼んで、何か早口でしゃべりながら下の子

の頭をなでてくれておりました。しばらくすると、暖かいオンドルの部屋に私たちを連れて行き、休むようにと床をたたいてうなずきました。「謝々、謝々」と頭をさげるしか、感謝の気持ちを表わし得ませんでした。日が立つにつれ子供たちは、老夫婦にもなれ近所の子供たちとも親しくなり、ワイワイとあはれ回って遊ぶようになりました。私は子供が家に連れて来る子供たちに散髪してあげようと考えました。おじいさんに鋏を買ってきていただいて、毎日近所の子供たちの頭を散髪してあげ始めました。だんだんうわさが広まって大人たちまで来るようになり、以前のような立派な道具はなくても、結構なんでも「やればやれる」ということを、心に植えつけることができました。それは、人生最大の喜びと誇りであると悟りました。そしてもう一つ大きな愛、それがいかに大きく温かなものであるかと言うことを、私たち親子は、この老夫婦に身を持って無言の中に教えていただくことができました。

子供たちは、老夫婦を自分たちのおじいさん、おば

あさんのように慣れ親しんで、日々を送ることができました。私は家から逃げ出すとき、持って出たお陰で、金銭の心配はありませんでした。散髪代として皆が置いていってくれたお金をおじいさんに渡そうとしましたが、受け取ってはくれませんでしたので、ここを去る時にと、少しずつ貯めておきました。

私は着たきりでしたので衣類を少しずつ買いためるためおじいさんに連れられて、支那町の盗品市場に出掛けて行きました。そのころには、私のうわさが町にも出ていたらしく、物珍しそうに二人を眺めながら、おじいさんに話かけてくる者もおりました。おじいさんは、にこにこ、笑いながら通り過ぎました。布や真綿やお多福綿などまでが盗品市場に出回っているのは驚きました。いろいろと山のように買物をして、帰りは洋車に乗って帰りました。おじいさんのお陰で久方ぶりの洋車に、心はずむ思いがしました。

翌日からはおばあさんに教えてもらいながら、小さい子供から順に上下の支那服を作りました。綿の入った服、真新しい下着に、子供は「おかあさんお正月が

来るの？」と首をかしげて尋ねます。おばあさんがころがるように笑います。あの悪夢のような日々が「うそ」だったのかと思うような毎日でございました。子供たちが覚えた支那語で友達と遊んでいるのをみると、このままここで一生を送ろうかとも考え始めておりました。

でも、子供たちの学校のことや、主人のことなどを考えると、やはりじつとしていた気にはなれませんでした。昭和二十一年の春の雪解けも始まった四月の下旬ごろとなりました。柳の若芽がみどりに萌える春が来ると、冬が終わる喜びがわき、思い切つて日本人の町に帰らなければと言ふ思いが、急にわき、おじいさんの所へ行き話をしました。おじいさんは、私の話を聞くと「めいほうみず「沒有法子」(仕方ない)」と支那語でいい、悲しそうな顔で自分たちの部屋に戻つて、行きました。翌日、日本人の住む柳町の塀の前まで来て、よく見て帰つて来るように言われ、私は町の情勢を見に行きました。町は大勢の日本人が持ち物や食べ物を軒下に並べ、お互い売り食いをしながら、その日その日を暮ら

している有様でした。北満からの難民の子供たちが、ひもじさに日本人住宅に入り込んで食べ物を盗んで大人たちにひどい目にあつたりしているのを見るとやはりおじいさんの所に残つた方がと考えたりもいたしました。

同じ日本人町にも暴動にも遭わず、自分の家に住みながら、ソ連兵や満人暴徒から難を逃れるために、何日でも共同の生活ができるように用意ができておりました。そして北満からよれよれになつて逃れて来る人たちのお世話のために懸命に立ち働く婦人の姿に胸の熱くなるのを覚えました。私たちは負けたのだと卑屈になつてはいけなさと新しい闘志がわいてきました。早速明日になつたら、おじいさんに話そうと決心をしました。おじいさんは、私たちが出て行くことを理解してくれました。また、「仕方ない」と一言いいました。別れることは本当にどんなときでも切ないものです。おじいさん夫婦は私たちの荷物を洋車にのせて一人、一人の頭をなでながら、肩を叩いて「つみけん「再見、再見」(さようなら)」と別れを惜しんでくれました。

私たち親子九人、家族が多いという理由で、民会の方に大きな公共施設の公会堂に入れていただきました。北満から避難してきた人たちと同じ施設でした。両親は女性二人でしたので、気軽にお話もでき、すぐに仲良しになり子供たちの世話をしてくださったり、身上話などして日を送りました。終戦後の行政はすべてストツプで、行政をつかさどる所と言えば、町の俱樂部を使った日本人民留民会があり、そして一方には、満鉄王国を誇った撫順炭鉱がありました。この二つの行政区がお互い協力しあって、民会は運営されておりました。市内では、民会からくる伝達事項を各区長が受け、隣組の組長へ、そして各組員へと回ってきます。皆が一樣に待ち望むのは、内地へ内地へと思いは飛ぶのでした。

六月ともなれば道路の水もほとんど溶けてしまい、所々に雪解けの名残を残しておりました。そのころ隣組長の方から、セメント会社の独身寮があったので移るようにとの通知があり、大急ぎで荷造りをして、長男、次男、長女に背負わせ、小さい子には下着類を

リュックに入れて背負わせ、私は乞食同然のかっこうで世帯道具をぶら下げて、撫順の町中を歩いて行きました。収容所から四国町にあるセメント会社までは、かなりの道のりで寮についたときは、子供たちはもう半べそをかき、今にも泣きださんばかりの有様で、こんなときに、主人がいてくれたらなどと考えたものです。でもそれは私たちだけではなく、ほとんどの当地の女性は、まだ帰らぬ主人を待っている者ばかりでした。寮につくと早速食事の用意のための燃料を探さねばなりません。大きな会社には暖房をたいた後のガラ置場があり、皆、そこに石炭のガラを拾いに行くのが日課となっていました。ガラ拾いをしながらも話はいつも主人のこと、内地のことばかりでした。

民会から難民用にといただいた関東軍の残留物資の毛布五枚と、市内で暴動に遭わずに済んだ方たちからの差し入れの布団類の数々に泣きました。外地にあって、日本人同志の強いきずなが弱者になったとき、こんなに強いものであったのかと、何とも言えぬ感動を忘れ得ません。現在八十六歳になんなんとするとき、

あのときの苦勞と、勇氣と、感動があつたからこそ、どんな苦勞も悲しみも、子供との別離もそして、恋、また、死別とも、見事に宗教によつて救われ、安らかな日々を送ることのできる幸せをひたすら言行によつて知つた私でございます。

社宅に落ちついた翌日からは、お世話になつた収容所に通い、難民の方たちの病人の世話、食事、下の世話に至るまでやらせていただきました。もともと、私は一日中動き回り立ち働くことを少しも苦痛に思つたことのない性分で、健康でしたので、家のことは、長男、長女にまかせて収容所、民会とこまねずみのように動き回りました。でも私たちがいくら懸命にお世話をしても、医者なし、薬なしの現状では、病人が良くなるという見込みはないのです。撫順中にある収容所の悲劇なのです。昨日は二人、今日は三人と次々とあの世とやらへ旅立っていかれました。死体を運ぶトラックが、収容所の裏から撫順の東のはずれを流れる運河川の砂敷にほうり出されて積み上げられていきます。死体の大きな山がだんだんと高く大きくなつていき、

四ツ、五ツとなるころにはまた、三回目の正月が、もうすぐそばまで近づいておりました。

収容所で来る日も来る日も、私の看とつた患者が次々と亡くなつて行くのを見るのが苦しく、あの顔、この顔が目には浮かんでくるのです。今日はもう収容所に行くのをやめようかと思つたりします。でもあの人がお水を欲しがるのでは、あの人は、下が汚れているのではと考えると、急いでエプロンに手がいつてしまいます。伝染するからよしたら？と止めてくれる友人もいましたが、私は不死身と、出かけて行きました。気が張りつめていたせいか、こうして無事に日本に帰りつきましたから……。

まだいろいろな目に遭いました。でも思い出せないほどに年を取つてしまいました。

昔からわがままで道楽者の主人は、音沙汰もなく、民会からの帰国命令がきても、帰つてはまいりませんでした。

終戦から三年目の三月、待ちに待つた帰国命令がまゐりました。出発は昭和二十三年六月五日、目的地：

山東省コロ島とありました。嬉しくて、何度も何度も通知書を読み直しました。当時「コックリサン」と呼ぶ占いが流行しておりました。皆、何かにすがりつきたいという願望の表れだったのだろうと思います。私もまた同じ願いを込めてまいりました。「コックリサン」の正体は割箸を組み合わせたものをテーブルの上に立て、占師が何か口に唱えながらテーブルを小さくよみにたたきますと、その立てたコックリサンが歩くように動きます。それが一人一人違います。割箸の動きによって答えが違うのです。主人は内地に先に帰って、私たちを待っているとお出ました。あの当時は、本当に主人は先に帰っているものと信じ切っておりました。天にも上る気持ちで百円札を、うやうやしく上げて帰りました。

いよいよ待望の六月四日出発の前日となりました。夕べからほとんど眠れず、子供たち一人、一人の荷物の点検、背に負う手作りの袋八ツ、私は長男と二人皆の夜具をしつかり結び大風呂敷に包み背から背負い片手に食物、片手に自分たちの衣類を持つように荷造り

をいたしました。現金は長男、長女、私と三人の肌じゆばんのお腹の所に「ポケット」を縫いつけ、その中にいれてしまいました。何かのときの用意にと三百円だけは小銭入れの中に入れ、ふところ深くしまいました。もちろん先の方には長目のひもがついております。翌朝、私は長女を二時に起こして、朝食は撫順と別れる最後の朝食です。支那町時代のおじいさんからの送り物の米を、全部炊きました。中には梅干を入れました。二人で一生懸命握り飯を作りました。午前三時子供たちを起こし、皆に何年ぶりかのお米の御飯をおなかいっぱい食べさせました。「お母さん、おいしいおいしい」という子供に長女と二人でポロポロと涙を流し泣きました。四時になり、荷物を背負った弟たちを上三人の子供は手を取って列に加わりました。「お姉ちゃん、お兄ちゃん、弟たちを頼んだわよ、お母さんはあなたたちの後にちゃんといっていますよ」、前方から私たちの団長さんが、「皆さん頑張りますよ」と叫ぶ声が聞こえます。暗い午前四時の道は、地獄への道のようにでした。四国町から撫順駅への道のりは何

時間も歩いたように遠い遠い道でした。耳の近くで「ホラもうあと五十歩、三十歩だよ」と、見送りに来てくださった民会の方の声に、ホット我に帰ったような気持ちでした。「ホーラ僕強かった。もう着いたよ、ごほうびに小父さんがだっこしよう」と下の子をだっこして頬ずりをしてくださった方のお名前も知らぬままです。間もなくして駅に入ってきたのは天井のない無蓋車で戦前関東軍が使っていた輸送車だと聞かされました。長男が「お母さん、雨が降ったら困るよネ」と心配そうに言いました。確か私は返事ができなかつたと思います。

汽車はいつまでも動きません。皆だんだんいらいらとし始め、男性たちは車から飛び下りてみたり、乗ってはみたものの、落ち着かず、どうにも手のつかぬ有様でした。しばらくすると団長さんが見えて、「皆さんよく聞いてください。今まで乗車賃を出せと言われて、奉天からの団長さんたちとで交渉してきたが、到底無賃では動かしてもらえないのでなんでもよいから出して欲しい」とのことでしたが、お金のない人々

ばかり、それと言って、品物といわれても、時計も指輪も皆、ソ連兵に取られてしまつてない。と不平の声があちこちから聞こえましたが、「出さねば、汽車も出ないので、皆さん、お願いします」と言われ、結局、ソ連兵の目を逃れた時計や指輪などが二十個集まつたそうで、ようやく撫順の駅を後にしました。

奉天から乗つた人は、私たちより二日前に乗り、乗つた途端に、時計が欲しい指輪を出せと言われ。最後は命まで出せと言われるのではないかと、汽車のつぎ目つき目にいる人たちから伝わってきました。撫順を出てから四日目、コロ島に着いたときはちょうど梅雨時の六月とあつて、雨の心配をしましたが、四日のうち一日だけが雨で、傘をさしても、雨のしずくが落ちてくるのが気になって子供たちは朝から無理矢理に寝せるのですが、なかなかじつとしてくれず、かおせた毛布がぬれるのが気になって、食事のこともできず、持ってきた鶏の丸焼きも残り少なくなつらい思いをしました。

昭和二十三年六月十日朝、コロ島に着きました。「ボ

「ツ」と船の「ドラ」の音は、昔、大連港に入ったときに聞いたあの七歳の折のドラの音と同じ響きで涙をさそう音色でした。

乗船前から長女の鈴子がおなかが痛いと言っておりましたが、乗船してからは何回も便所に立ち、余り回数が多くなりましたので、船医さんをお願いをして、休息室に移していただくことになりました。船医さんの話では撫順にいるころから悪かつたのではないかと言われました。きっとそうだったのかも分かりません。発疹チフスや、赤痢がまん延した所で暮らしてきたのですから、チフスにかかつていたかもわかりません。船医さんは急性腸炎と診断され、一応ここに隔離して置きましょうと言われましたが、翌朝早く医務室から呼びにこられ、お母さん一人で来るように言われ、恐る恐る行きますと娘の死を告げられ、絶対外にはもれぬようにと言ひ渡され、娘の顔も見られず、別れさえ告げることもできぬうちに、娘は水葬に付されることを告げられました。船中の伝染、まん延を恐れての処置であつたことが後々分かりました。処置を聞かされ

た私は、ただ茫然と甲板を眺め、涙を流すだけでした。現在八十六歳の私は、仏壇に向かい、鈴子の冥福を祈るばかりでございます。

その年の六月十二日、博多港に着くと直に主人が帰っているはずの能古の島の実家に、鈴子のいない七人の子供を連れて帰りました。帰るとすぐに、主人の叔父に当たる人が出て来て、「宮崎のお正人様の下に、引揚者の立派な家がでけるとるげなけん、明日、役場に行つて頼んでこう。今夜仕方なかけん、家に泊まつて行きやよかたい」と言われ、あんなにも内地へ内地へのあこがれは一体何だったのかと、夢は一夜にして消え去りそうになるのをじつと我慢をするうちにだんだんと、持ち前の意地っ張り根性が頭をもたげてきました。「何くそ負けるものか」……と。

翌朝役場に行き係員の方に引揚証明書を見せ、すぐに係員の方から福岡市役所に連絡していただき、またぞろぞろと子供を連れて市内の宮崎の引揚者住宅へ向かいました。福岡市の住宅係の方は親切で鍋、やかん、毛布、敷布団に茶碗類までそろえていただきました。

住宅は多人数なので、二間の六畳に三畳の小部屋のあ
る部屋をいただきました。新しい畳の香りに、新しい
生活への力がわいてきました。撫順を立つときに、し
っかりと、着物に縫いつけてきた現金は、政府の新円
切り替えとかで、大事に持ってきたお金はただの紙切
れとなっておりまして。

翌日からは職探しです。なかなか思うような職はあ
りませんでした。お金は博多港で降りたときに一世帯
当たり千円をいただいたお金があるだけです。何とか
仕事をと懸命に探し回った末、ダンスホールの皿洗い
の仕事がありました。早速支配人さんに会って頼みま
した。事情を聞いて、それは大変だね。皿洗いもい
が別にダンスの方は引揚者ならできるので、と聞か
れましたが、ダンスは断り、その日の夜から皿洗いを
いたしました。その日払いの日給で五十銭いただき電
車賃は別に出してくださいのには本当に感謝いたし
ました。半年間ぐらい働き、少しずつ節約をして貯金
ができましたので、支配人にお礼を述べ、やめさせて
いただくことにしました。

実はダンスホールのダンサーたちの行きつけのパ
ーマ屋に、美容師が欲しいとの話を教えてくれました
ので、早速行ってみました。新しい髪のパーマネントは
知りませんが、洋髪ならコテが使えると申しま
すと、それでは、髪を結ってみるように入れられ、その
結果、合格ですと言われ、翌日から出勤となりました。
家に帰ると娘の雪枝が喜んで赤飯を炊いてくれました。
楽しい我が家がようやくやく一步、一步と近づいて来るよ
うな夜でございました。

翌日発出勤の日、先生は「上衣を用意してるのよ、
使ってる。そして今日三人のお客さんが洋髪を結って
くださいと来てらっしゃるのよ」と言われ、しばらく
使わぬコテを暖める用意をしました。その日は大変先
生に喜ばれ吉日の嬉しい一日でした。それからは毎日
忙しい日々を楽しく過ごすことができ、こんな幸せな
日が続くのが不思議な気さえするのです。

ある日、市役所より長女を中学校へ、長男を小学校
へ手続をするようにとの通知をいただきました。引揚
者ということで、いろいろと恩典はいただきましたが、

私一人ではとても、八人の世帯を食べさせるのはむずかしいので、家の一間を学生さんに間貸しをしてはと教えていただき幸い良い方を世話していただきました。後で知りましたが、不動産屋という職業だと知りまし

た。一カ月五百円の家賃に、三カ月分敷金と言うことで御自分は一カ月分の家賃を世話料として差し引き、三カ月分敷金の千五百円を私にボンと渡してくれました。「ではよろしく頼みます」と帰っていかれました。

学生さんは九大の学生で、無口で温厚そうな良い人に見えました。その学生さんも、半年も立つところからは自分の方から口を開くようになり、子供たちを御正人様の銅像の所まで散歩に連れて行くようになり、夜の食事と一緒にするようになりました。自分たちの身の上を話し合うようになり、お互いに頼る者もないと分かると、親密の度も深まるようになりました。子供たちはお兄ちゃんお兄ちゃんとなつて、勉強を見てもらったり夜の笹崎八幡宮に参ったり楽しい毎日、父親のこともすっかり忘れているかのような日が続いております。そんなある日、突然主人が玄関からぬ

つと入って来ました。ひげを伸ばし軍服のままの姿でした。私の頭の中に学生さんの姿が浮かびました。「何を考えているんだ」「僕だよ」、茫然として何を言っているか、分かりませんでした。

復員した主人は、舞鶴港から復員列車で福岡に着き、生まれ故郷の能古の島に帰りつき、そこでここ笹崎の家を探しているうちに、突き当たりの人に尋ねたところ、「ああ、あの学生と一緒に同居している人」と言われて、かっとなつて家に帰って来たのだそうです。私がどんなに説明をしようとしても、耳をかそうとはしませんでした。

彼はその後、私の家を出て、九大卒業を目の前に退学してしまっているのです。若気の至りとはこのことなのでしょう。大牟田の実家を処分して福岡の姪の浜に居を構え、私を迎える準備を整えてくれたのです。

福岡市会議員N氏経営の塗装会社に入社、何にも持つてこなくてもいいからと私を迎えてくれました。七人もの子供を置き去りして家を出た私は初めて妻の幸

せを知りました。けれど一カ月立ち、二カ月と日が立つにつれ、落ち着かぬ日々が始まり、ふと博多町に出てみようと言う気になり、人込みでにぎわう天神町に行ってみました。向こうの方の人込みの中から、「お母さん、お母さん」と大声で、人中をかきわけて飛んで来る男の子がいます。はっとして人影にかくれたものの、じっとしておれず、爪先立って手を振りました。

正男でした。長男の正男でした。手をしっかりと握り締めて肩を抱きました。いつの間にか人のいない所で話し合っておりました。東野は私が出てすぐに近所の人を後添いにもらったそうで子供の面倒を見てくれていたとのことでした。何となくホッと安心しました。

「正男ごめんしてネ、馬鹿なおかあさんと思ってるでしょ、ごめんしてネ。どうしてもお父さんが許してくれなかったの」、「どうして」「正男が大人になつたらわかつてくれるかもしれない。ごめんネ」切なくて正男と一緒にいることがつらく、逃げるように店の電話番号を渡して帰りました。

二度目に会った日、何か物言いたげな正男の顔が今

だに「母さん」と悲しげに私に迫って来るのです。本当に馬鹿な、つまらぬ母だったと、くやんでもどうする術もありません。二日後、新聞の三面で見た活字は、何度見ても、「東野正男」でした。

伊岐の松原で、「東野正男」「筈崎中学校卒業前」「自殺」とありました。体がぐるっと回り、目の前が真っ暗になり分からなくなっていました。

翌日目が覚めたとき、境野の顔が心配げにのぞいておりました。

それからの私はあるお方にこんこんと南無妙法蓮華經の教えをいただき、罪深き我が身の恐ろしさに、お教えの有り難さを悟りました。それからは主人も、自分の業（ご）の深さに悟りましたが、若いころからの飲酒が元で、悪病の「胃がん」に「うつ病」となり、生気（しょうき）のある日、「静子すまなかつたネ。早く籍に入れんといかんネ」「今更そんな心配いらないわ」といいますと、「いいやいかん」「今から大牟田の役場に行こう」といいますので、「じゃ明日早く行ってくるかネ」翌日、

早く天神から特急の西鉄電車で行き、婚姻届けを出し、

急いで帰り報告を済ませますと。「よかった、よかった」とにっこり笑ってくれました。それから三日目、苦しみもせず安らかに眠りにつきました。多くの同門の方々の南無妙法蓮華經の読経に送られて、主人は六十八歳の人生を終わりました。お陰様で二十何年間勤めてくれましたので、主なしでも、私の国民年金と、主人の労災の年金のお陰で十分なお手当てをいただいているため、現在市の住宅で一人静かに読経三昧の日々を送らせていただいております。

南無妙法蓮華經 合掌

【執筆者の横顔】

境野静子さんは明治四十三年生まれの八十五歳、福岡県、父親は福岡市の炭鉱で働いていた。大正初期にあこがれの満州へ、母と静子さんの三人は満鉄経営の撫順炭鉱社宅に居住となり、父は採炭業務についていた。父は十年間働いて炭鉱を辞めて撫順市内に玩具店舗を経営し始めた。静子さんは尋常高等小学校を終えて独習と経験をへて女髪結い師の免許を得たのが十七

歳だった。髪結業を独立し何人か弟子を使用するに至り繁盛した。そのころ町内の東野鹿之助理容師と結婚し、主人は理容、静子さんは髪結いというわけで使用人の弟子五人をかかえてすばらしい財産を築いた。

しかし、昭和十八年五月、主人は召集で出征し、間もなく二十年八月十五日終戦。たちまち平和な生活から満人やソ連軍の強盗殺人暴動のさ中、静子さんは住宅も営業所も捨てて八人の子供を引きつれて避難逃亡の身となり、撫順の街から旧市内へとうろろ歩き空腹をかかえて親子悲泣のどん底にいた際、静子さんが髪結い師であることを覚えていた中国人の老人から声をかけられた。奥さんここはあぶない。私の家にいらつしやいと親切にも老人は居宅に連れていき、老人夫婦とその家族に助けられた。静子さんは早速髪結い師として働き、金銭を得た。老人に上げようとしたが、受けとらず、正に地獄にあつて仏に救われたような同情に浴した。

運よく故郷に引き揚げてこられたものの、多くの子供連れで、戦後の事情下では親せきが引き取り至難だ

つたので静子さんは直ちに髪結い師の免許を活用し、子供を養育し生計を支えた。芸は身を助くの諺のごとくである。

静子さんの生活力旺盛、しかも働くこと即楽しみとする信念、正に男まさりの勇氣と決断の持主である。ただ多情多感の長短相半ばする性格を持ち、子息を自殺に追いやったのは自分だと悔悟し、仏門に入って読経三昧の日々をおくる八十五歳の老婦人である。

(拙引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

満蒙建設を省みて

佐賀県 浦 郷 布治衛

慶應年間前より先祖は、この地に定着して米穀商と農業を営み、私が第四代目に当たり、約二百有余年の家系を伝統的に維持して現在に至る。私は一九〇四年生まれで九十歳になる。まだまだ元気で一人住まいを

しているが、別に不自由とも思わない。

幼少時は、尋常高等小学校高等科二年を卒業と同時に青年学校二カ年を終了。長男のため農業に従事し、水田十三ヘクタールと畑地二十ヘクタールを耕作した。家族構成は年期奉公人も入れて八・九人の大家族で、稼働力も四・五人ぐらいは農作業に従事していた。私の兄弟姉妹は、男三人女二人で、一応安定した生活を経て、姉だけが小学校高等科を卒業、後に皆当時の中学校を経て各自就職した。当地区は農漁村で約四百戸余り、内六割近くが農業に従事、約四割ぐらいが漁業経営であった。自宅は中程度以上の専業農家として平凡な暮らし、当時は文化面も低い実情にあり、部落慣例も現在とは異なり各種行事も案外多く、平凡な近所の交流も繁雑なもので、田舎の方弁でにぎわい、平和な雰囲気助け合って楽しさもあつた。

大正時代末期ころより米価が下がり、昭和初期ころまで農村恐慌時代となつて、世は正に不況のどん底に落ち入り生活は苦境の状態となつた。六十キロ入り米が四・五円だったと思う。麦は三円そこそこではなか